

平成 30 年 6 月 17 日現在

機関番号：34301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03055

研究課題名(和文) 変動期アフリカ系社会におけるメディアリテラシーと公共圏の展望

研究課題名(英文) Media Literacy and Life Strategy in Africa and Afro-Brazilian nation: A comparative study of anthropological and political science of publicness

研究代表者

田中 正隆 (TANAKA, MASATAKA)

大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：30398549

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はグローバル化が進むアフリカ社会で、マスメディア、モバイルメディアがどのように人々の生活に浸透し、それを構築するかを、ブラジルのアフリカ系社会との比較のもとに明らかにする。マスメディアはとく離れた他者の情報を身近にした。携帯電話は通信の利便化だけでなく、政治や経済、社会活動の場への個人の参加を容易にした。だが、不測の政変、災害、感染症へのメディアリテラシーがこうした社会では求められている。本研究は具体的な個人とメディアとの関わりを史的にたどりつつ、情報環境の変化が社会にもたらす意味を明らかにする。

研究成果の概要(英文)：In African and Afro-Brazilian societies, how does the globalization of mass media and mobile media infiltrate and support people's lives? Mass media and social media have enabled the exchange of local information between people who are in distant places. With mobile phones, they can take part in political, economic, and social activities and communicate more easily than ever before; they can tune in to radio and TV programs with a smartphone and even participate in interactive programs. With their local newspapers and other media, Afro-Brazilians have solidified their Black identities in the state. In developing countries, media literacy has become increasingly more necessary in order to access important information of unexpected disasters, political changes, and more. We examine what new media options have brought about and how they have altered societies based on the history of interrelationships of media and people in Benin, Togo, and Brazil.

研究分野：文化人類学

キーワード：メディア アフリカ ブラジル 公共圏 リテラシー 参加 社会変動

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、個々人の生活目線を重視し、個人像に焦点をあてる社会科学の趨勢を背景に、マスメディアやモバイルメディアを人がどのように利用し、それが人の生活をいかに構築し、変容させてゆくかを明らかにする。ブラジルは黒人奴隷最大の入植地であるが、独自のアフリカ志向性がねづきつつも、人種格差問題に悩んでいる。搬出元となったベナンでは文化、経済、政治的にディアスポラの連帯を求める動きがある一方で、国内に民族間の葛藤を抱える。だが、電子メディアが浸透した両社会ではアフリカ性や伝統文化を強調し、人種、民族間対立を隠ぺいしている。従来、人類学はインフラが未整備な途上国を対象としてきたが、調査の現場でメディアをあつかう現地の人々に焦点をあてることはなかった。だが、むしろ後発国こそメディアをさまざまに工夫・利用している。そこで、こうした途上国(ベナン、トーゴ)と新興国(ブラジル)の比較研究から、個人はどのように社会とつながりうるのか、具体的な個人がメディアを介してどのように「公共」につながるのかを、本研究によって明らかにすることが必要と考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、マスメディアやモバイルメディアを人がどのように利用し、それが人の生活をいかに構築し、変容させてゆくかを、途上国(ベナン、トーゴ)と新興国(ブラジル)の比較研究によって明らかにする。文化的、歴史的に関わりの深いアフリカとラテンアメリカを比較、対照することで、より広くメディアと人の総合研究を行なう。

不測の政変、災害、感染症へのメディアリテラシーが、いま途上国では問われている。アフリカの携帯端末は通話のほかに送金・支払サービスの手段として普及が進んでいる。また、人々が放送を受信し、番組に参加することで、「公共」を問い、語りあう場が生じつつある。メディアは経済、政治、社会活動の場への個人の参加を容易にしたが、情報の格差が新たな不安や対立を生み出している。本研究はグローバル化するアフリカ社会で、メディアがどのように人々の生活に浸透し、その暮らしを構築するかを、ブラジルのアフリカ系社会との比較から明らかにする。具体的な個人とメディアとの関わりに焦点をあて、情報環境の変化が社会にもたらす意味をさぐる。西アフリカと南米での調査にもとづき、メディアをめぐるテクノロジーとリテラシー発展のための学術的貢献を目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究ではメディア導入と社会変化が著しいアフリカ諸国と新興国ブラジルを現地調査し、その資料を対照する。文化的、歴史的に関わりの深いこの両地域を比較、対照することで、メディアと人をめぐる生活史と社会

史をたどる。

各調査地でのマスメディア、モバイルメディア事情、一般の人々の利用状況をまず確認する。次に個々人のメディアとの関わりに焦点をあて、キーパーソンを設定する。政治家、活動家、放送局社主、ジャーナリストなどそれぞれの調査から、個人がメディアをとおして公共とつながる機会を明らかにする。人生における転機(ex. 結婚、就職、移住)と社会史における大きな変動(ex. 民主化、政権交代、経済危機)の時期に留意する。そのうえでメディアと関わる個人の活動を政治、経済、宗教の各項目から比較総合する。

以上の視座から資料収集を行ない、以下の三点についての情報を求めた。

#### (1) メディアの公共圏の展望

情報の送り手である記者、スタッフ、企業社主、スポンサーや政府報道官らと、オーディエンスである市民が電話やインターネットで交流する相関からメディア公共圏の展望を把握する。

#### (2) 個人史とメディア

国家元首、政治家、活動家、ジャーナリストといった個人に焦点をあて、ライフヒストリーを追いつつ、人生の転機とメディア、社会の変遷史を重ねて明らかにする。

#### (3) メディアからの働きかけ

メディアによって記録された人物自身が、その経験に影響をうける。メディアから人への働きかけの事例を各社会で明らかにする。

上記に関しての各地の資料整理は代表、分担者各自で行なうが、メディア論の理論的総合はおもに代表者が、社会運動論の理論総合はおもに分担者が中心となって、相互に討論を重ねる。さらに、焦点をあてる個々の分野としては、政治と経済を代表者と分担者で、宗教を代表者で、社会運動を分担者が担当し、それらに関わる各社会のキーパーソンを設定して調査をすすめる。

2015-2016年度にはベナン南部、トーゴ中部においてメディアと地域NGOについての聞き取り、また、視聴者のメディア利用として参加型番組への参与観察調査を行なった。ブラジルでは、黒人コミュニティにおけるメディア利用、メディア参加の実態を聞き取りやアンケートによって調査し、イタリア系、レバノン系、日系等の移民層におけるメディアとの比較を視野に入れながら調査を進めた。

2016-2017年度には、ベナン南西部モノクフォ県のローカルラジオ局調査と2016年大統領選挙の世論状況についてアンケートと聞き取り調査を行った。トーゴのメディア調査でもジャーナリストや視聴者への聞き取りを行った。トーゴでは2015年の選挙とその結果の人々の受容についてデータ収集を行った。この作業を通して世界各地でみられる世代交代と社会変動に関する比較研究への糸口を見出した。ブラジルでは五輪招致などの国家的行事を梃に社会変動が進みつつあ

り、これらと本共同研究の課題である公共性の内容との節合が期待された。分担者は 2015 年度の資料の分析と論文執筆に専念し、研究ノート論文として公開した。

2017-2018 年度では、ベナン南西部モノクフォ県においてローカルラジオ局調査と 2016 年の政権交代後の世論状況についてアンケートと聞き取り調査を行った。この作業をとおして、一般民衆がマスメディアを通してどのように候補者の情報を得て、それがどのような影響を投票行動に及ぼしているかを、識者や一般の人々の声をとおして把握した。トーゴにおけるメディア調査では、実際に現地のラジオ番組に参加し、他の出演者やジャーナリストとの意見交換を行なった。ここでも 2015 年の選挙とその結果の人々の受容についてデータ収集を行った。滞在期間中に市民によるデモンストレーションに遭遇し、現政権への意見表明について参加者に聞き取りをした。分担者はブラジル内 4 都市(サルヴァドール、サンパウロ、ポルトアレグレ、リオデジャネイロ)において現地調査を行ない、人種とネーションについての言説の歴史の変遷をたどった。具体的には、ブラジル黒人運動の理論母体となった黒人新聞について資料収集を行った。

#### 4. 研究成果

不測の政変、テロ、災害、未知の感染症へのメディアリテラシーが、いま途上国では問われている。アフリカの都市、農村を問わず、携帯端末は通話のほかに送金・支払サービス的手段として普及が進んでいる。この端末はラジオ・テレビが受信でき、移動中や外出先でも放送へ人々がアクセスするのが容易となった。アフリカ諸国は 1990 年の民主化をへて、そのごの新政権は放送電波の脱専有化を施行した。以降、多くの民営放送局が誕生し、娯楽性と視聴者参加型の番組を特徴として、市民の声を放送に広く取り入れるようになった。つまり、人々が放送を受信し、番組に参加することで、「公共」を問い、語りあう場が生じている。

本研究の調査によって得られた放送局の資料では、民営局は国营局に比べて視聴者の参加番組が多く、人々が日々の暮らしで感じる不満を電話で話すというものがあつた。番組は表現の自由があるのだから、思うことを話し、社会のデモクラシーが進歩するようにしようと呼びかける。ベナン、トーゴの調査を通じて、参加型の常連の参加者の実態を示し、彼らの生活史を比較検討することで、アクティヴ・オーディエンスの特質を明らかにできた。発展途上国の放送番組の研究では、放送局主体でどのような報道がなされているかなどの内容分析が主であり、参加する視聴者に焦点をあてたものは他地域においても少ないため、重要な貢献と考えられる。

このような議論のもととなった資料は、本研究期間の地道な現地調査によって得られ

たものである。代表者はベナン南部と南西部、トーゴ南部都市部のローカル放送局調査と視聴者の世論調査を行った。その際に 2015 年トーゴ大統領選挙と 2016 年ベナン大統領選挙の前後の世論について聞き取り調査を行ない、元首への投票という「パブリック」な関心事がどのように人々を捉えているかを把握できた。これは研究期間中に生じた政権交代を具体的な事例とすることで可能となったことであり、一般民衆がマスメディアを通してどのように候補者の情報を得て、それがどのような影響を投票行動に及ぼしているかの事例研究となった。この経験から、世界各地でみられる政治アクターの世代交代と社会変動に関する比較研究への糸口を見出した。

また、分担者によるブラジル調査では、2016 年にサンパウロ、サルヴァドール、リオデジャネイロを、2017 年にはサルヴァドール、サンパウロ、ポルトアレグレ、リオデジャネイロを訪れ、資料収集した。当時、五輪招致などの国家的行事を梃に社会変動が進んでいる現況を確認しつつ、かつてのブラジル黒人運動の理論母体となった黒人新聞について史料分析を進め、人種とネーションについての言説の歴史の変遷を明らかにした。分担者はこれを後記する博士学位論文に結実させており、代表者の雑誌論文と並行して、本研究によって得られた最大の成果となった。今後、政治学、人類学、地域研究の分野に大きなインパクトを与えることが期待される。

以下では本研究および調査の実施過程で得られた新たな課題の展望を、西アフリカを対象として記述する。つまり、メディアと人々の公共圏に注目することで、アフリカ系社会の変動、とりわけ政治シーンの世代交代と体制転換の可能性をよみるという課題である。

民主化以降 2 度の政変をかさねて政治アクターが交代したベナンと、大統領職の世襲をめぐる騒乱をへて徐々に新たなアクターへの世代交代が進むトーゴ。隣接する両国は資源・産業面で小国でありながら国民会議を経た民主化、カリスマ的政治アクターの世代交代、民営ラジオや新聞の隆盛など興味深い共通点と差異が存在する。今後の課題として、メディアがとりあげはじめた人々の声と活動に着目し、ポスト・カリスマ期を生きる人々の変化への希望について、考察したい。

世紀をまたぎ、長期にわたってトーゴ政治に君臨したエヤデマ大統領が 2005 年に死去した。彼は経済、政治上の国父としてエヤデマイズムと称される強固な権威主義的統治をおこなってきた。彼の死後、体制はずみやかにその息子フォールに移行し、国内外の非難を浴びながらも、トーゴは旧体制からの変革を少しずつ遂げてきている。メディアによって国際的に報道された、2005 年の選挙後暴動や難民流出は、その後終息し、人々は平常

の暮らしへと復帰したかにみえる。

2005年以降の国政を追ってみても、2007年議会議員選挙、2010年の大統領選挙をへて、ポスト・エヤデマ期も二巡目の政権の再構築、市民による審判を迎えている。投票所の混乱や不正な票操作、反体制派集会の弾圧という物理的圧制とともに、政権批判についての報道規制はなおも続く。だが、与野党間の駆け引きやアクターの交代が近年政界では進んでいる。とりわけ有力野党 UFC 代表オリンピックとフォールが2010年5月に和解したことは、政権の懐柔に墮ちたかつてのカリスマとして人々を落胆させた。トーゴ政府は旧体制の政党 RPT から UNIR へ改編し、安定のなかの変化のイメージを植えつけようとする。

他方、ベナンではケレク、ソグロといった民主化転換期のリーダーが政治シーンから退場し、実質的に世代交代が行われている。トーゴでの世襲と対照的にベナンでは特定の親族やエスニックによらず政権交代がなされているが、むしろ、政治シーンの外部から参入した新参加者が、当選する傾向がある。2016年選挙では新星パトリス・タロンが当選した。タロンも海外勤務経験のある経済人であり、自らの政党や政治集団をもたない。ところが、ソグロやヤイ・ボニなど就任時に人々の大きな支持を集めた元首が、任期末にはスキャンダルによって退陣するという経緯はきわめて似通っている。

ベナンでは元首の二選以後、人々の大きな期待は急速に潰え、再選に抗する反対運動を呼び、過去と決別する目新しい人物に人々の期待が集まる。国家元首をめぐって反復される、こうした希望と失望はベナンでもトーゴでも認められる。では人々はいったい何に票を投じたのか。人々を動員する変化への期待とは何か。メディアと人々の「公共」のゆくえとして、こうした世代交代と社会の転換あるいは(非)転換に対する人々の希望を具体的に検討してゆきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

1. 矢澤達宏「20世紀前半のブラジル黒人運動の言説にみる人種とネイション サンパウロ州の黒人新聞の分析から」『ラテンアメリカ研究年報』、査読有、37、2017年、pp.53-81

2. 田中正隆「The 6th IAS Humanities Korea (HK) International Conference :Visualizing Crossing and Hybridity in African Societies and Cultures 参加報告」『アフリカ研究』、査読有、91、2017年、pp.57-61

3. 矢澤達宏「ブラジル黒人新聞に関する研究

動向と紙面資料の所蔵・公開状況」

『Encontros Lusofonos』、査読有、18号、2016年、pp.41-54

4. 田中正隆、「メディアをめぐる公共圏の検討 ベナンの視聴者参加番組の事例をとおして」『国立民族学博物館研究報告』、査読有、40-1、2015年、pp.149-192

[学会発表](計 3 件)

1. TANAKA Masataka, Vodun in Democracy and Media Use: Religion and the Public Sphere in Benin, The 6th IAS Humanities Korea (HK) International Conference, 2016年10月6-7日、韓国外国語大学龍仁キャンパス、グローバル・リーダーシップ・アカデミー

2. TANAKA Masataka, The Narrative of Democracy, the Practice of Journalism in West Africa: The Case of Radio Broadcasts in Republic of Benin. International Union of Anthropological and Ethnological Sciences(IUAES) 2015、2015年7月14-17日、Thamasaat University, Bangkok, Thailand

3. 田中正隆、ポスト・エヤデマ期におけるトーゴのメディア事情 2015年5月23-24日、第52回日本アフリカ学会学術大会、犬山国際観光センター

[図書](計 2 件)

1. 矢澤達宏、上智大学アメリカ・カナダ研究所、イペロアメリカ研究所、ヨーロッパ研究所編、「黒人たちが織りなすもう一つのアトランティック・ヒストリー」『グローバル・ヒストリーズ 「ナショナル」を越えて』上智大学出版、2018年、pp.273-299

2. 田中正隆、梅屋潔、シンジルト、「儀礼と分類」『新版文化人類学のレッスン』学陽書房、2017年、pp.185-207

[その他]

1. 矢澤達宏「ブラジル黒人運動にとってのアフリカ ブラック・ディアスポラが父祖の地に向けるまなざしの諸相」(慶應義塾大学法学研究科提出博士論文、2018年1月学位取得) 博士学位論文

2. 田中正隆、「番組で不満を叫ぶ アフリカのラジオリスナーがつくるもう一つのデモクラシー」2015年11月 SYNODOS Inc. SYNODOS: Accademic Journalism [http://synodos.jp/?post\\_type=international&p=15435&page=2](http://synodos.jp/?post_type=international&p=15435&page=2)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

田中 正隆 (TANAKA MASATAKA)

大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：30398549

(2)研究分担者

矢澤 達宏 (YAZAWA TATSUHIRO)

上智大学・外国語学部・教授

研究者番号：00406646